

看護婦イメージに関する研究 (2)

—学年別による検討—

小林 ミチ子
和田 佳子, 福原 紀, 大石 武信¹⁾新潟県立看護短期大学, 日本大学医学部附属看護学校¹⁾

An Investigation Study of the Image of a Nurse (2)

—A Cross-sectional Comparison of the Students' Image of a Nurse
in each of the 3 grades of the Nursing Program—Michiko KOBAYASHI
Keiko WADA, Nori FUKUHARA, Takenobu OHISHI¹⁾Niigata College of Nursing, Nihon University Nursing College¹⁾

Summary The purpose of this study is to identify the image of a nurse that students in Niigata College of Nursing have. It involves a cross-sectional comparison of the students' image of a nurse in each of the 3 grades of the nursing program. The subjects were 278 nursing students; 100 students of the 1st grade, 92 students of the 2nd grade and 86 students of 3rd grade. The questionnaire investigation were carried out in November, 1998. The results indicate the followings:

- 1) Nursing students have a positive image of a nurse generally. Not only was a nurse (nursing) perceived as "having a sense of responsibility", "having technical skills", "being worth doing", also was perceived as "doing a heavy work".
- 2) The more advanced the student was, the more the students' positive image increased. Significant increase in the students' positive image of a nurse have been seen in the items of "intelligence" and "occupational attractiveness".
- 3) The difference of the students' image of a nurse depends on their recognition of the requisites for a nurse.

要 約 本研究の目的は、本学学生の看護婦に対するイメージの特徴、および学年進行による看護婦イメージの変化について検討することである。対象は、本学看護学科の1年生 100 名、2年生 92 名、3年生 86 名の計 278 名である。調査は 1998 年 11 月に行った。主な結果は以下の通りである。

1. 本学学生は全体的に看護婦に対して肯定的イメージを抱いている。その特徴は、「責任感のある、技術がある、やりがいのある」というイメージである。しかし、一方で「重労働で、辛い」という否定的なイメージもあわせもっている。
2. 学年が進むにつれて肯定的イメージが強くなる傾向がある。「知性」、「職業的魅力」の因子の項目に肯定的な変化がみられた。
3. イメージの差は、看護婦に必要な要素に対する認識の違いを表していると思われる。

Key words イメージ (image)
看護婦 (nurse)
看護学生 (nursing student)
学年 (grade)

はじめに

われわれは平成9年度から入学生を理解するために、新入生に対してアンケート調査を行ってきた。それによるとほとんどの学生が看護職を目指して入学している。年々その割合は増加傾向にある。このように入學時に看護職志向の高い学生が、3年間の教育過程の中で職業的アイデンティティをどのように確立し成長していくのか、その社会化過程を探るためのひとつの視点として看護婦イメージに着目した。

看護婦・看護職イメージに関する研究は、多くは教育の手がかりとする目的で、施設、学年、入学・志望動機、看護婦志向性、自己教育力などと看護婦イメージとの関係を調査したものがほとんどである（高橋 1972; 石塚 1982; 謝花 1984; 上大迫 1993; 真鍋 1994; 渡邊 1996; 鶴田 1996; 大谷 1997; 岩永 1997）。その他、関連するものとしては、看護学生の社会化過程の観点から職業意識について調査をしたものがある（小島 1975; 波多野 1982）。

これらの報告で共通することは、看護学生は全般的に看護婦に対して肯定的なイメージを抱いていること、入学動機が積極的で自分の意思で入学した学生はイメージがより肯定的であることなどである。看護短大生と専門学校生・看護大学生・他職種志望学生との比較および学年別変化などの調査に関しては、必ずしも結果の一致はみられず様々である。なお、多くの研究において、看護婦イメージには、カリキュラムの内容、臨床実習、教員のかかわりなどが影響することを示唆している。海外のイメージ研究では、これら影響因子に関してさらに論を進めている。たとえば、Kiger (1993) は、スタッフの態度が学生の質を決定し、イメージの発達を左右すると主張している。Andersson (1993) は、教員・看護婦・医師などのスタッフおよび患者との相互作用からセルフアイデンティティが築かれると述べている。社会学者であるWeller *et al.* (1988) は、看護婦の社会化に最も重要な要因は教員であると言明している。

今回は、看護学生の社会化過程に関する研究の基礎調査として、本学学生の看護婦イメージの特徴、および学年進行による看護婦イメージの変化について検討することを目的とした。

1. 対象および方法

1. 対象

平成10年度新潟県立看護短期大学看護学科の1年生100名（平均年齢18.88歳, SD=0.78）、2年生92名（平均年齢20.05歳, SD=2.71）、3年生86名（平均年齢20.72歳, SD=0.64）の計278名である。

2. 調査用紙の構成および調査方法

イメージの測定はSD法（semantic differential technique）を用い、7段階評定尺度法で行った。調査項目は、和田ら（1999）が検討し抽出した48の形容詞対を使用した。尺度の配列や形容詞対の左右の方向は無作為配列法とした。

調査は、1998年11月に講義終了後、集団調査法により実施した。

3. 分析方法

各尺度の各段階毎に1点から7点を配し得点化を行った。看護婦イメージの48項目について1要因3水準の分散分析を行い、多重比較はTukey法により5%水準で実施した。統計処理は、統計パッケージPC-SAS Version6.04を使用して行った。

4. 対象の学習背景

調査時は、前期の講義が終了し、後期の講義が始まって1ヶ月経過した時期である。

1) 1年生

前期の履修科目は、医学概論・解剖生理学・微生物学・社会福祉原理などの専門基礎科目に加え、専門科目の看護学概論・基礎看護技術および演習である（解剖生理学・基礎看護技術演習は後期も継続）。

2) 2年生

専門基礎科目は、生化学・栄養学・薬理学・人間発達学・臨床心理学・放射線医学・病態学を履修している。専門科目については、1年次の後期に基礎看護学が終了し、次いで成人・老年・小児・母性・精神看護学のそれぞれ概論と保健を履修し、各臨床看護学の講義が始まったばかりである。

また、はじめての4週間の基礎実習を10月に終了したところである。基礎実習の内容は、2週間の病院実習（基礎看護学実習Ⅰ）、1週間づつの保健所実習（基礎看護学実習Ⅱ）と保育所実習（小児看護学実習Ⅰ）である。

3) 3年生

専門基礎科目および専門科目の必修科目はほとん

と終了しており, 専門必修科目で未履修なものは, 看護管理学と訪問看護実習のみである. 各論臨床実習は, 4月から10月まで14週間行われた.

II. 結果

1. 看護婦に対するイメージの特徴

新潟県立看護短期大学看護学科生 (以下本学学生という) の看護婦イメージの各項目の学年別平均得点と分散分析の結果を表したものが表1である. また学年別に看護婦イメージのプロフィールを表したものが図1である.

表1 イメージ項目の学年別平均得点および分散分析結果

								M(SD)
項目			1年生	2年生	3年生	F	Tukey	
専門的 能力	Q13	責任感のない — 責任感のある	6.49(1.13)	6.52(1.03)	6.26(1.45)	1.28	1=2=3	
	Q3	向上心のない — 向上心のある	5.11(1.11)	4.99(1.34)	5.29(1.19)	1.38	1=2=3	
	Q33	価値のない — 価値のある	5.51(1.24)	5.74(1.03)	5.74(1.00)	1.42	1=2=3	
	Q40	気が利かない — 気が利く	5.38(1.21)	5.42(1.28)	5.52(1.06)	0.35	1=2=3	
	Q19	鈍重な — 機敏な	5.88(1.07)	6.21(0.73)	5.83(1.00)	4.33 *	1<2, 3<2, 1=3	
	Q9	些細な — 重要な	5.80(1.39)	5.89(1.07)	5.48(1.29)	2.63	1=2=3	
	Q7	感受性のない — 感受性のある	4.90(1.09)	5.17(1.09)	5.35(1.11)	4.00 *	1<3, 1=2, 2=3	
	Q8	ぐったりした — 生き生きした	5.29(1.39)	5.47(1.06)	5.09(1.18)	2.13	1=2=3	
	Q23	軽率な — 慎重な	5.79(0.95)	5.72(0.96)	5.98(0.91)	1.79	1=2=3	
	Q27	判断力のない — 判断力のある	5.30(1.51)	5.75(1.19)	5.85(0.93)	5.16 **	1<2, 1<3, 2=3	
	Q5	やりがいのない — やりがいのある	6.19(1.26)	6.08(1.51)	5.73(1.65)	2.37	1=2=3	
	Q1	浅い — 深い	5.28(1.24)	5.55(0.92)	5.44(1.09)	1.41	1=2=3	
人格的 特性	Q35	頼りない — 頼もしい	5.58(1.13)	5.84(1.00)	5.60(1.11)	1.60	1=2=3	
	Q34	不親切な — 親切な	5.51(1.01)	5.40(1.00)	5.60(0.95)	0.94	1=2=3	
	Q37	きつい — やさしい	4.92(1.55)	4.73(1.40)	4.86(1.50)	0.42	1=2=3	
	Q31	冷たい — 温かい	5.25(1.14)	5.23(1.11)	5.42(1.10)	0.77	1=2=3	
	Q20	思いやりのない — 思いやりのある	5.77(1.22)	5.75(1.11)	5.35(1.54)	3.01	1=2=3	
	Q2	親しみにくい — 親しみやすい	4.37(1.29)	4.20(1.15)	4.49(1.28)	1.25	1=2=3	
	Q43	激しい — 穏やかな	4.43(1.30)	4.45(1.21)	4.62(1.33)	0.58	1=2=3	
	Q41	陰鬱な — 明朗な	5.12(0.98)	5.39(0.93)	5.48(0.97)	3.59 *	1<3, 1=2, 2=3	
	Q24	意地悪な — お人好しな	4.01(1.04)	4.08(0.73)	4.17(0.62)	0.92	1=2=3	
	Q36	暗い — 明るい	5.28(0.99)	5.45(1.02)	5.40(0.97)	0.70	1=2=3	
	Q26	理解のない — 理解のある	4.85(1.02)	5.09(0.79)	5.03(0.94)	1.75	1=2=3	
身体的 負担	Q4	体力のない — 体力のある	5.98(1.11)	5.92(1.32)	5.67(1.25)	1.58	1=2=3	
	Q39	弱々しい — たくましい	5.86(0.86)	5.98(0.78)	5.70(0.97)	2.30	1=2=3	
	Q10	ささやかな — 大変な	6.22(1.03)	6.18(0.96)	5.88(0.94)	3.19	1=2=3	
	Q48	病弱な — 丈夫な	5.92(0.90)	5.96(0.94)	5.76(0.98)	1.15	1=2=3	
	Q18	弱い — 強い	5.66(1.05)	5.80(0.88)	5.50(1.26)	1.80	1=2=3	
	Q44	気が弱い — 気が強い	5.24(1.03)	5.47(0.95)	5.22(1.03)	1.71	1=2=3	
	Q15	技術のない — 技術のある	6.05(1.10)	6.16(0.86)	6.15(0.98)	0.38	1=2=3	
	Q11	重労働な — 軽労働な	1.43(0.67)	1.58(0.68)	1.81(0.96)	5.70 **	1<3, 1=2, 2=3	
知性	Q47	辛い — 楽な	1.95(1.10)	2.24(0.89)	2.51(0.94)	7.54 **	1<3, 1=2, 2=3	
	Q28	愚かな — 賢い	5.34(0.84)	5.73(0.76)	5.51(0.98)	4.87 **	1<2, 1=3, 2=3	
	Q6	頭の悪い — 頭の良い	5.00(1.16)	5.71(1.02)	5.24(1.27)	9.16 **	1<2, 3<2, 1=3	
	Q45	非科学的な — 科学的な	4.76(0.98)	4.83(0.90)	4.95(0.92)	1.01	1=2=3	
	Q38	劣っている — 優れている	5.21(0.98)	5.48(0.84)	5.31(0.99)	1.99	1=2=3	
	Q17	非学問的な — 学問的な	5.51(0.95)	5.79(1.03)	6.02(0.96)	6.41 **	1<3, 1=2, 2=3	
	Q46	怠惰な — 勤勉な	5.15(0.95)	5.58(0.88)	5.43(0.93)	5.35 **	1<2, 1=3, 2=3	
	Q42	知的でない — 知的な	5.19(0.94)	5.39(0.94)	5.42(1.10)	1.52	1=2=3	
職業的 魅力	Q22	非倫理的な — 倫理的な	4.84(1.01)	4.93(1.10)	5.33(0.98)	5.65 **	1<3, 2<3, 1=2	
	Q14	ユーモアのない — ユーモアのある	4.47(0.93)	4.42(1.02)	4.83(1.12)	4.13 *	1<3, 2<3, 1=2	
	Q16	魅力のない — 魅力のある	5.50(1.11)	5.90(0.97)	5.66(1.17)	3.31 *	1<2, 1=3, 2=3	
	Q25	苦しい — 楽しい	3.12(1.27)	4.10(1.10)	3.92(1.25)	17.70 **	1<2, 1<3, 2=3	
	Q29	不自由な — 自由な	3.04(1.21)	3.64(1.09)	3.77(1.03)	11.56 **	1<2, 1<3, 2=3	
	Q32	地位の低い — 地位の高い	4.06(1.14)	4.32(0.89)	4.51(0.93)	4.81 **	1<3, 1=2, 2=3	
	Q30	嫌いな — 好きな	4.67(1.06)	4.84(1.03)	4.71(1.18)	0.62	1=2=3	
	Q21	低収入な — 高収入な	4.42(1.44)	5.03(1.05)	5.06(1.06)	8.61 **	1<2, 1<3, 2=3	
	Q12	貧しい — 豊かな	4.56(1.14)	5.18(0.97)	5.19(0.98)	11.65 **	1<2, 1<3, 2=3	

**p<.01

*p<.05

不等号p<.05

等号n.s.

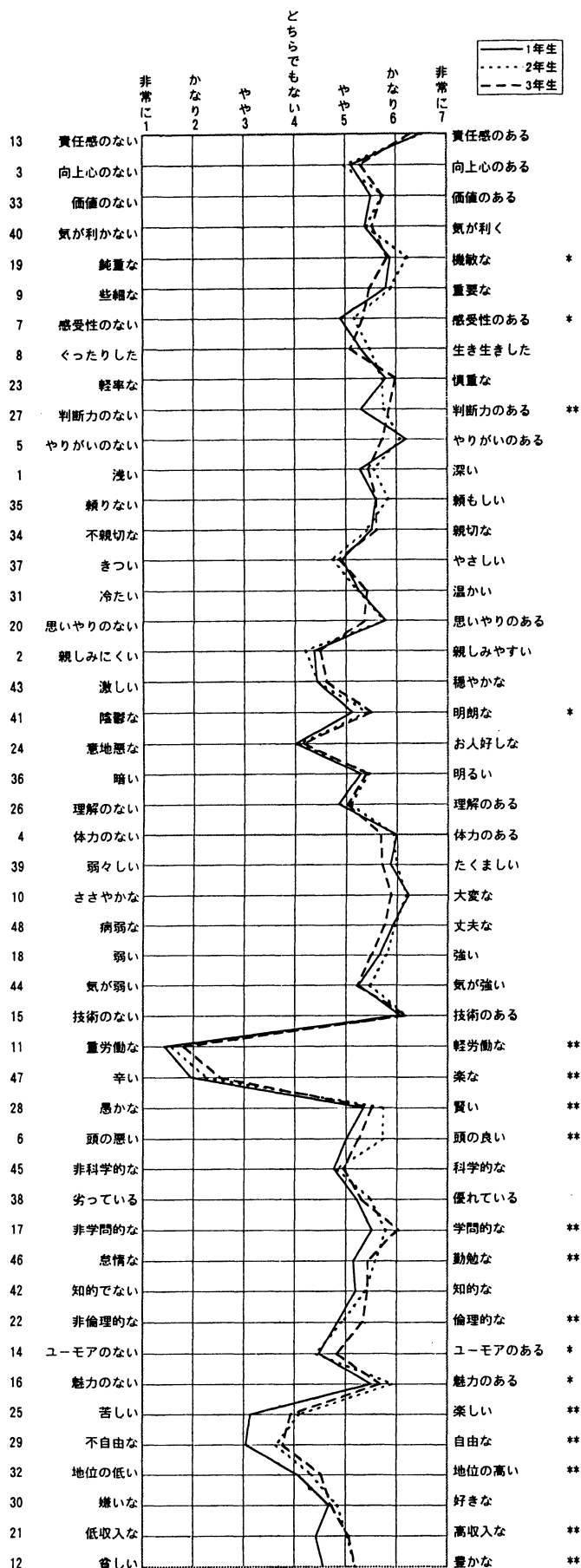


図1 看護婦イメージの学年別プロフィール

なお、図・表作成の際には、各形容詞対を因子ごとに分類し、形容詞の左右の方向を統一した。

まず最初に、本学学生の看護婦イメージの全体のプロフィールをみると、図1に示すように全体的に高得点である。「軽労働な—重労働な」、「楽な—辛い」以外の項目はすべて右側に偏っている。

肯定的なイメージとして高得点範囲（「かなり」6点～「非常に」7点）にあるものは、「責任感がある」、「やりがいのある」、「大変な」、「技術のある」の4項目である。反対に否定的なイメージとして低得点範囲（「かなり」2点～「やや」3点）にあるものは、「重労働な」、「辛い」の2項目である。

平均値の高い項目（6点以上）を学年別にみると、1年生は「責任のある」、「大変な」、「やりがいのある」、「技術のある」の4項目、2年生は「責任のある」、「機敏な」、「大変な」、「技術のある」、「やりがいのある」の5項目、3年生は「責任のある」、「技術のある」、「学問的な」の3項目であった。

2年生に特徴的にみられた項目は「機敏な」であり、3年生の場合は、「学問的な」であった。

2. 学年別にみた看護婦に対するイメージ

各形容詞対の分散分析の結果を各因子ごとに述べる（表1）。

① “専門的能力”の因子

「機敏な—鈍重な」（ $F(2, 275)=4.33, p<.05$ ）, 「感受性のある—感受性のない」（ $F(2, 275)=4.00, p<.05$ ）, 「判断力のある—判断力のない」（ $F(2, 274)=5.16, p<.01$ ）の3項目が有意であった。

多重比較を行ったところ、「機敏な—鈍重な」に1・3年生と2年生との間に有意な差があり、2年生のほうに「機敏な」と回答するものが多い。「感受性のある—感受性のない」では1年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「感受性のある」と回答するものが多い。「判断力のある—判断力のない」では1年生と2・3年生との間に有意な差があり、2・3年生のほうに「判断力

のある」とする回答が多い。

他の10項目、「責任感のある—責任感のない」($F(2, 275)=1.28$)、「向上心のある—向上心のない」($F(2, 273)=1.38$)、「価値のある—価値のない」($F(2, 275)=1.42$)、「気が利く—気が利かない」($F(2, 275)=0.35$)、「重要な—些細な」($F(2, 275)=2.63$)、「生き生きとした—ぐったりした」($F(2, 274)=2.13$)、「慎重な—軽率な」($F(2, 275)=1.79$)、「やりがいのある—やりがいのない」($F(2, 275)=2.37$)、「深い—浅い」($F(2, 259)=1.41$)、「頼もしい—頼りない」($F(2, 275)=1.60$)は有意ではなかった。

② “人格的特性”の因子

「明朗な—陰鬱な」のみ有意であった($F(2, 275)=3.59$, $p<.05$)。

多重比較を行ったところ、1年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「明朗な」と回答するものが多い。

他の9項目、「親切な—不親切な」($F(2, 275)=0.94$)、「やさしい—きつい」($F(2, 274)=0.42$)、「温かい—冷たい」($F(2, 275)=0.77$)、「思いやりのある—思いやりのない」($F(2, 275)=3.01$)、「親しみやすい—親しみにくい」($F(2, 275)=1.25$)、「穏やかな—激しい」($F(2, 275)=0.58$)、「お人好しな—意地悪な」($F(2, 275)=0.92$)、「明るい—暗い」($F(2, 275)=0.70$)、「理解のある—理解のない」($F(2, 275)=1.75$)は有意ではなかった。

③ “身体的負担”の因子

「軽労働な—重労働な」($F(2, 275)=5.70$, $p<.01$)、「楽な—辛い」($F(2, 275)=7.54$, $p<.01$)の2項目が有意であった。

多重比較をおこなったところ、両方とも1年生と3年生との間に有意な差があり、3年生より1年生のほうに「重労働な」、「辛い」と回答するものが多い。

他の7項目、「体力のある—体力のない」($F(2, 274)=1.58$)、「たくましい—弱々しい」($F(2, 275)=2.30$)、「大変な—ささやかな」($F(2, 275)=3.19$)、「丈夫な—病弱な」($F(2, 274)=1.15$)、「強い—弱い」($F(2, 275)=1.80$)、「気が強い—気が弱い」($F(2, 275)=1.71$)、「技術のある—技術のない」($F(2, 274)=0.38$)は有意ではなかった。

④ “知性”の因子

「賢い—愚かな」($F(2, 275)=4.87$, $p<.01$)、「頭の悪い—頭の良い」($F(2, 275)=9.16$, $p<.01$)、「学

問的な—非学問的な」($F(2, 275)=6.41$, $p<.01$)、「勤勉な—怠惰な」($F(2, 275)=5.35$, $p<.01$)、「倫理的な—非倫理的な」($F(2, 274)=5.65$, $p<.01$)の5項目が有意であった。

多重比較をおこなったところ、「賢い—愚かな」、「勤勉な—怠惰な」では1年生と2年生との間に有意な差があり、2年生のほうが「賢い」、「勤勉な」と多く回答している。「頭の良い—頭の悪い」では1・3年生と2年生との間に有意な差があり、2年生のほうに「頭の良い」とする回答が多い。「学問的な—非学問的な」は、1年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「学問的な」とする回答が多い。「倫理的な—非倫理的な」では、1・2年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「倫理的な」とする回答が多い。

ここで有意でなかった項目は、「科学的な—非科学的な」($F(2, 275)=1.01$)、「優れている—劣っている」($F(2, 274)=1.99$)、「知的な—知的でない」($F(2, 275)=1.52$)の3項目である。

⑤ “職業的魅力”の因子

「ユーモアのある—ユーモアのない」($F(2, 275)=4.13$, $p<.05$)、「魅力のある—魅力のない」($F(2, 275)=3.31$, $p<.05$)、「楽しい—苦しい」($F(2, 274)=17.70$, $p<.01$)、「自由な—不自由な」($F(2, 275)=11.56$, $p<.01$)、「地位の高い—地位の低い」($F(2, 274)=4.81$, $p<.01$)、「高収入な—低収入な」($F(2, 275)=8.61$, $p<.01$)、「豊かな—貧しい」($F(2, 275)=11.65$, $p<.01$)の7項目である。

多重比較をおこなったところ、「ユーモアのある—ユーモアのない」では、1・2年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「ユーモアのある」とする回答が多い。「魅力のある—魅力のない」では1年生と2年生との間に有意な差があり、2年生のほうに「魅力のある」とする回答が多い。「楽しい—苦しい」、「自由な—不自由な」、「高収入な—低収入な」、「豊かな—貧しい」の4項目は、いずれも1年生と2・3年生との間に有意な差が認められ、2・3年生のほうが肯定的な回答をしている。「地位の高い—地位の低い」では1年生と3年生との間に有意な差があり、3年生のほうに「地位の高い」とする回答が多い。

有意でなかったのは、「好きな—嫌いな」($F(2, 274)=0.62$)だけであった。

以上の結果をみると、“人格的特性”および“身体

的負担”の因子では、ほとんどの項目が有意でなかった。一方，“知性”および“職業的魅力”の因子に関しては、相対的に有意に差が認められる項目が多い。しかも学年進行とともに肯定的イメージに推移する傾向がうかがえる。

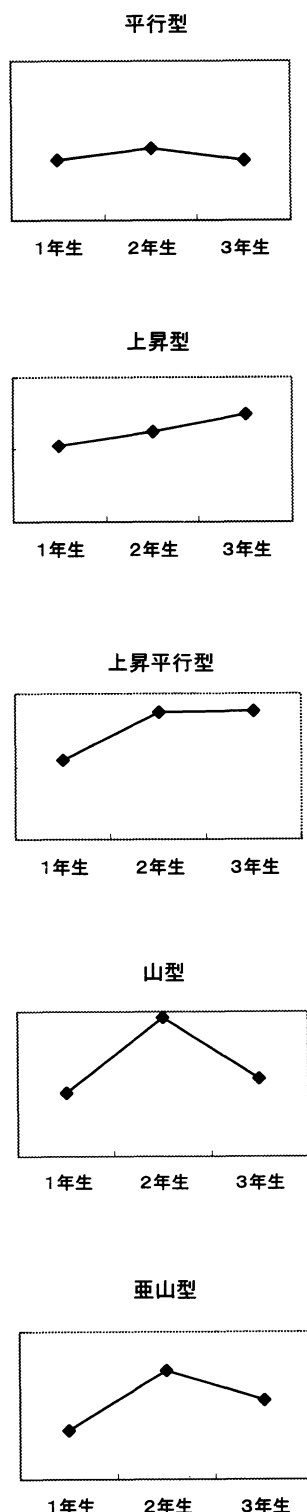


図2 イメージ項目ごとの学年変化の型

3. イメージ項目ごとの学年変化

イメージの項目ごとの学年変化は次の5つの型に分類される(図2)。

- ①平行型：経年的変化がほとんどないもの。有意差のなかった30項目が該当する。
- ②上昇型：学年進行に伴い肯定的イメージに変化するもの。「感受性のある—感受性のない」,「明朗な—陰鬱な」,「重労働な—軽労働な」,「楽な—辛い」,「学問的な—非学問的な」,「倫理的な—非倫理的な」,「ユーモアのある—ユーモアのない」,「地位の高い—地位の低い」の8項目である。
- ③上昇平行型：1年生よりも2年生にイメージが上昇するが,その後変化せず平行状態にあるもの。「判断力のある—判断力のない」,「楽しい—苦しい」,「自由な—不自由な」,「高収入な—低収入な」,「豊かな—貧しい」の5項目である。
- ④山型：2年生でイメージが上昇するにもかかわらず,3年生では低下に傾くもの。「機敏な—鈍重な」,「頭の良い—頭の悪い」の2項目である。
- ⑤垂山型：2年生でイメージが上昇するが,1・2—3年生で有意の差が認められないもの。「賢い—愚かな」,「勤勉な—怠惰な」,「魅力のある—魅力のない」の3項目である。

III. 考察

従来の看護学生を対象にした看護婦および看護職イメージの研究では、概して好意的・肯定的イメージである(謝花ら 1984; 石塚ら 1982; 上大迫ら 1993; 真鍋ら 1994; 鶴田ら 1996; 渡邊ら 1996)。その特徴については、「責任感が強く、重要で、価値がある」,「が「重労働で、自由がない」と報告している(石塚ら 1982; 鶴田ら 1996)。本学学生の看護婦イメージもこれらの結果と同様に、全体的に肯定的イメージであり、その特徴は、「責任感のある、技術がある、やりがいのある、大変な」という職業人のイメージである。しかし、一方で「重労働で、辛い」という否定的なイメージもあわせもっている。単に好意的・肯定的なイメージだけではなく両面的な捉え方をしていると思われる。活動的側面での厳しい状況を認識しつつ、価値的側面としてやりがいを認めているといえる。

学年別のイメージの変化では、全体的に学年進行とともに肯定的イメージに傾いている。最も変化のみられたイメージ項目は、「知性」,「職業的魅力」の因

子である。そして、これらの因子の項目については、とくに2年生が肯定的に捉えている。

この結果に対して、上大迫ら(1993)、真鍋ら(1994)、鶴田ら(1996)は3学年を通して肯定的なイメージではあるが、その度合いは1年生に比べ3年生の方が低いと報告している。また、真鍋ら(1994:433)は、看護大学生と短大生を比較して、短大生とは反対に、大学生は学年が進むにつれ肯定的イメージであったと述べている。そして、これはカリキュラムの違いによるものであると分析している。3年生にイメージ低下が認められたことについては、「入学後の理想的・観念的イメージが、より現実的・具体的な実像方向に修正されたため」と解釈している。

入学後(1年生)のイメージは、学生自らの主体的・内発的に形成されたものとは考え難い。一般的に人間の対応に必要とされるような人格的なイメージに関しては、「親切で、やさしく、温かく、思いやりがあり..」というような社会が昔から期待してきた伝統的なイメージをそのまま容認していると思われる。また、イメージの否定的な側面については、看護婦不足に関連したマスメディアの影響を受けていると思われる(危険が伴う、きつい仕事、勤務形態が不規則など)。本学学生のイメージも、このような社会通念的で漠然とした観念的イメージが、教育過程が進むとともに、臨床実習を体験し、実際に看護婦に接することによって、現実の体験に基づく自分なりのイメージとして認知された結果である。すなわち、学生は学習過程の各時点で、真にあるべき看護婦像を模索・追究していると言い換えることができる。したがって、「現実的・具体的な実像」とは、社会にすでに存在する実際の看護婦を意味するのではなく、むしろ学生が実際に即して内省的に追究する看護婦像と理解すべきである。このように考えると、イメージが低下しても上昇しても主体的に形成された「実像」に変わりはない。このように考えられるからこそ、イメージの発達には、カリキュラムなど教育の影響が大きいと言われるのではないだろうか。

謝花ら(1984)、大谷ら(1997)は、2年生のイメージの落ち込みを報告している。われわれの調査では、そのような現象はみられなかった。むしろ、「知性」、「職業的魅力」の因子の項目では1・3年生よりも上昇傾向がみられた。謝花ら(1984:93)は、1年生は「ロマンチック」、2年生は「シリアス」、3年生は「ゆとり」と捉えている。そして、看護婦イメージが

看護婦志向性と相互に関係することを前提に、カリキュラム編成上1・3年生に比べ2年生の場合、教師とのかかわりが少ないことが原因であると分析している。つまり、教師とのかかわりが少ないため看護婦志向性が低下し、その結果イメージが低下したということである。看護学生の社会化(看護婦イメージを含む)と教員とのかかわりに関する研究をみると、Weller *et al.* (1988:182)はイスラエルの看護学生を調査し、学年が進むにつれ学生と教員とのイメージは一致すると報告している。また、Olsen *et al.* (1968)は、カリフォルニア大学の看護学部で3年間フィールドワークを行い、多数の視点から教員の影響力について述べている。これらが示すように、「教員とのかかわり」が要因として大きいことは確かであると思うが、時間的なことと同時に質的な側面の検討が不可欠となるだろう。

本学の「2年生のイメージの上昇傾向」の原因として一番考えられるのは、調査時期である。この時期は、初めての基礎実習が終了したばかりで、臨床の現場から受けた印象が大きく影響したと考えられる。学生はこの基礎実習のころから自分の体験に基づいた看護婦イメージを徐々に創りはじめられると思われる。

2年生に有意に高かった項目は、山型の2項目「機敏な—鈍重な」、「頭の良い—頭の悪い」と亜山型の3項目「賢い—愚かな」、「勤勉な—怠惰な」、「魅力のある—魅力のない」である。したがって、基礎実習終了後の2年生は、単純に言う、看護婦に対してとくに「機敏な、頭の良い、賢い、勤勉な、魅力のある」というイメージを抱いていたと思われる。しかし、3年生では「賢い」、「勤勉な」、「魅力のある」というイメージはそのままであるが、「機敏な」と「頭の良い」イメージは低下する。

実際に、学生の看護の眼が開かれるのは臨床実習を経験し、看護婦・医師をはじめとする医療従事者および患者・家族との出会いからである。最初の基礎実習における看護婦に対するイメージは、イメージ発達の基盤となり、今後の学習行動に影響を及ぼすと思われる。イメージの発達において、基礎実習が重要な役割を果たすと推測できる。

以上、学年別の看護婦イメージの変化を検討してきたが、変化する項目や変化の仕方をみると、イメージの差は、看護婦に必要な要素に対する認識の違いを表していると思われる。学生は、教育過程が進むにつれて変化するイメージを徐々に内面化し、看護婦として

の自己概念を発達させていくと思われる。

IV. まとめ

学生生活の中で重要な節目の時期と思われる3時点、つまり入学当初、2年生の最初の基礎実習体験直後、3年生の各論臨床実習終了後において、看護婦に対するイメージを調査し、以下の結果が得られた。

1. 本学学生は全体的に看護婦に対して肯定的イメージを抱いている。

その特徴は、「責任感のある、技術がある、やりがいのある」という職業人のイメージである。しかし、一方で「重労働で、辛い」という否定的なイメージもあわせもっている。

2. 学年が進むにつれて肯定的イメージが強くなる傾向がある。「知性」、「職業的魅力」の因子の項目に肯定的変化がみられた。
3. イメージの差は、看護婦に必要な要素に対する認識の違いを表していると思われる。

今回は横断的調査を行った。今後は、同一対象を卒業後まで継続して縦断的に調査する予定である。

引用・参考文献

- アン・ハドソン・ジョーンズ編著：看護婦はどう見られてきたか、時空出版、東京、1997。
- Andersson, E.P.: The perspective of student nurses and their perceptions of professional nursing during the nurse training programme, *Journal of Advanced Nursing*, 18, 808~815, 1993.
- 波多野梗子, 森田チエコ, 小野寺杜紀：看護学生の学習および看護職に対する態度の発達の变化, *看護教育*, 23(8), 513~520, 1982.
- 石塚百合子, 木村泰子, 白佐俊憲ら：看護婦イメージの研究, *看護教育*, 23(7), 446~453, 1982.
- 岩永秀子, 山本昇：看護学生の自己教育力におよぼす看護婦イメージの影響, *日本看護学教育学会誌*, 7(3), 17~27, 1997.
- 上大迫敏子, 石原俊一, 中島美代子ら：看護職イメージに関する研究(1)―看護学生における看護職イメージについて―, *日本看護学会 24 回収録*, 178~180, 1993.
- Kiger, A.M.: Accord and discord in students' images of nursing, *Journal of Nursing Education*, 32(7), 309~317, 1993.
- 小島禮子：看護学生の職業意識の形成に関する研究, *看護研究*, 8 (1), 48~61, 1975.
- 真鍋淳子, 野尻雅美, 中野正孝ら：看護学生の看護婦イメージの研究 大学生と短大生の比較, *看護教育*, 35(6), 427~433, 1994.
- Olsen V. & Whittaker E.: *The Silent Dialogue*. Jossey Bass, San Francisco, 1968.
- 大谷和代, 松浦妙子：看護学生の入学動機別看護婦イメージ等の経年的変化から探る看護教育の課題, *看護展望*, 22(9), 78~85, 1997.
- 謝花美佐子, 平良広子, 安里栄子ら：看護学生の看護婦イメージの学年別による検討 動機と意思との関連性, *看護教育*, 25(2), 89~94, 1984.
- 高橋章子, 玉置昭子, 中島紀恵子：学生の看護婦像に関する研究, *看護研究*, 10, 48~59, 1972.
- 鶴田来美, 工藤綾子, 鈴木淳子ら：短大生の学年による看護婦志向性と看護婦イメージに関する研究, *順天堂医療短期大学紀要*, 7, 72~82, 1996.
- 和田佳子, 小林ミチ子, 井上正美ら：看護婦イメージに関する研究(1), *新潟県立看護短期大学紀要*, 5, 3~7, 1999.
- 渡邊裕美, 杉山敏子, 寺島美紀子ら：看護学生の卒業時における「病院」、「患者」、「看護婦」、「看護」のイメージの変化―1年次と比較して―, *東北大学医療技術短期大学部紀要*, 5(2), 141~148, 1996.
- Weller, L., Harrison, M., Katz, Z.: Changes in the self and professional images of student nurses, *Journal of Advanced Nursing*, 13, 179~184, 1988.